

# 日常生活から経済をみつめなおす

**日時** 2025年5月10日(土) 13時30分～16時30分

※受付開始13時

**会場** 京都府立京都学・歴彩館 1階小ホール（会議室）

**講師** 浅井 良夫氏（成城大学名誉教授）

「戦後の二大インフレ  
一焼け跡の経済危機と高度成長末の「狂乱物価」」

**講師** 小堀 聡氏（京都大学人文科学研究所准教授）

「世界史のなかの高度成長」

## 集会趣旨

「歴史から現在（いま）を考える集い」は、日本史研究会が毎年開催している一般向けの講演会で、今年は、「日常生活から経済をみつめなおす」をテーマといたします。

戦後の二大インフレと高度成長期における、エネルギーと環境変化について、歴史学の観点からとらえなおし、これからの課題や展望について議論します。

◆事前申込不要◆一般来聴歓迎◆会場整理費500円

## 浅井 良夫氏「戦後の二大インフレ

### —焼け跡の経済危機と高度成長末の「狂乱物価」—

コメをはじめとする生活物資の価格高騰が、毎日のようにニュースで取り上げられている。私たちは、長い間、「デフレからの脱却」という言葉に慣れ親しんできたが、あらためてインフレの歴史的経験を振り返る時期に来ているように思う。

本講演では、敗戦直後のインフレと、1973年～74年の田中内閣期の「狂乱物価」の戦後二大インフレを取り上げ、焼け跡の混乱の時代と、高度経済成長末期の歴史像を描いてみたい。インフレは、経済学で説明し尽せる現象ではなく、政治現象でもあり、社会現象でもある。激しいインフレや、極度の不況の際には、それまで陰に隠れていた政治的な対立や社会の矛盾が一挙に噴き出し、世の中の構図がくっきりと目前に立ち現れる。歴史現象としてのインフレは、「時代を映す鏡」である。

## 小堀 聡氏「世界史のなかの高度成長」

「多少冗談のように聞こえるかもしれませんが、いまわれわれがちょうどその末期ぐらいに生きているのではないかと思われる高度経済成長期の社会……この時期におこった日本の社会構造の変化がきわめて深刻なものであるということはいまでもありません。」中世史家の網野善彦がこう記したのは、1980年のことであつた(『日本中世の民衆像』)。それから45年後の現在、網野の「冗談」は、もはや通説になったと言ってよい。そして、この深刻な変化は、日本という枠を超えて、東アジアの奇跡や「大加速」といった世界史的な現象の中に位置付けつつ、論じられている。

今回の講演では、これら近年の研究動向を紹介したうえで、高度成長期における日常生活の変化やその原因を、エネルギーと環境変化に注目しつつ考えたい。

### <アクセス>

#### ・電車

京都市営地下鉄【烏丸線】北山駅[K03](1番、3番出口)南へ徒歩約4分

#### ・バス

北山駅前(京都市バス4系統・北8系統)南へ徒歩約4分

府立大学前(京都市バス1系統・204系統・205系統・206系統・北8系統/京都バス32系統・34系統・35系統・46系統)北へ徒歩約6分

